

坪田讓治全集

8

坪田讓治全集

8

新潮社

坪田讓治全集 第八卷

印刷 昭和五十三年二月十五日

発行 昭和五十三年二月二十日

著者 坪田讓治
つばた じょうじ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二一

東京都新宿区矢来町七十一番地

電話 東京 (〇三)

二六六―五一 業務部
二六六―五四 編集部

振替番号 東京四―八〇八

印刷・株式会社 金羊社 製本・大口製本株式会社

定価 二八〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

坪田讓治全集 第8卷 目次

三平の夏

天の秘密地の秘密

鼠やトンボ

四人でした事

雀と良介

ガマやイタチ

小勇士

子猫

山の上の岩

小鳥と三平

写真

太郎のゆめ

おじさんの発明

三平蛙

ふしぎな森

すずめの話

森のてじなし

一〇

七

五

六

六

三

四

三

六

六

三

五

五

七

六

六

六

あめ玉

牛の友だち

子ねこのかくれんぼ

木つつき

太郎の舟

正太の海

キャラメルでんしゃ

一つのパン

ねこの太郎

旗と大将

シナの子ども

谷間の池

甚七おとぎばなし

七人の子供

甚七昔ばなし

小獅子小孔雀

山のみずうみ

三

三

三

六

九

七

三

三

四

五

七

四

三

一〇

一四

一〇

一五

池のクジラ

鯨の夢

岩のはなし

易島の兄弟

魔法の庭

王春の話

ハサンの鳥

桃の実

きつねとぶどう

三本の柿の木

角のあるけだもの

おうむとわに

あばれもの次郎

おじいさんのメガネ

八郎とこい

貝の話

枝の上のからす

一四〇

一四一

一四二

一四三

一四四

一四五

一四六

一四七

一四八

一四九

一五〇

一五一

一五二

一五三

一五四

一五五

一五六

サバクの虹

二〇六

雀のそうしき

二一〇

犬と友達

二一四

ナスビと氷山

二二三

うさぎ

二二五

ひるの夢よるの夢

二三八

ひとつぶのたね

二四九

けんかタロウとけんかジロウ

二四〇

うさぎとてんぐ

二四三

ゆめ

二四四

三びきのアリ

二四九

タコをとばす

二五三

ガマのげいとう

二六一

おじいさんおばあさん

二六三

ニジとカニ

二六四

ねことままごと

二六五

ままごと

二六六

よっちゃんとりんど

二六

たねをまく

二六

おべんとうのはなし

二七

うし

二七

山の湖（長篇）

二七

*

あとがき

坪田譲治 二七

編集後記

三二

（箱カット・中尾彰）

坪田讓治全集 第8卷 (童話二)

森
の
て
じ
な
し
他

三平の夏

小学二年生、元気な三平は夏休みになると、お母さんにつれられて、鶉飼のおじさんの処へ出かけた。おじさんの家では美代子が病気で床にっていた。三平は去年の夏、この鶉飼の家にあずけられて、美代子に世話をやかせた記憶が頭の中に帰って来て、美代子が奥の間にいると聞くと、直ぐその方へ駆けていった。

「美代子ちゃん、どうしたんだい。何でねてるの。」

小学六年にもなる美代子であったが、病気には勝たれない。唯だニッコリして、三平を迎えた。

「え、どうして、ねてなんかいるんだい。」

悪気なんかミジンもないのだが、三平の口は尖り、ついこんな質問になる。

「病気だからよ。」

美代子が弱々しく答える。

「病気？ ふーん。」

三平には病気がさも不思議そうである。

「そうかあ、病気なのか。それでねてるのか。早く起きればいいじゃないか。」

「だって、そうゆかないわ。直らなければ起きられないじゃないの。」

「ふーん。」

三平は何を言っても感心する。然し彼は美代子の枕もとにまだ立ったままなのである。

珍らしそうに美代子の顔から、かけられた蒲団などを眺め入っている。

「三平ちゃん、大きくなったわね。」

美代子が言う。

「そうさあ、僕もう八つなんだよ。来年は九つ、さ来年は十だあ。」

「へえ、そうなるの。」

そう言われると、三平は戸まどいした。

「あれっ、そうならないの。だって、八つの次は九つでしょう。つぎは十、十じゃないか。」

こんなことを言われて、美代子はいき出してしまうた。

「ホホホホ、三平ちゃんは相変らず面白いのね。」

「面白いさあ。僕、去年、池の側で河童を見ようと思ったけれど、とうとう見ずにしまったでしょう。僕んちの村の友達に河童の話してやったんだけど、金ちゃん鶴ちゃんなんか、どうしても河童いないって言うんだよ。此度は必ず河童見てゆくつもりだ。約束してんだもの。行って来うと。」

もう三平は山の方に行きそうにするのである。

「ダメツ、三平ちゃん、あんたまたそんなこと言い出した。去年のこともう忘れたの。池の河童見るって、私をずい分困らせたじゃないの。そのあげく、村の大騒ぎになったじゃないの。あんたがいなくなつたって、大騒動して索していたら、押入ん中でグウグウグウグウ眠っていて——」

斯う言われて三平も文句はない。仕方なく、そこにあぐらをかいて、

「だけど、美代子ちゃんねていてつまんないじゃないか。」
と云うのである。

「でも、もう起きるわ。そうね、明日、いえ、明後日、きっと明後日は起きるわ。そうしたら面白いこととして遊びましょうね。」

言つた通りに美代子は病気を直して床をあげた。

そして今日は幸介を加えて三人、家の後の物置の処で遊んでいる。

昨夜鵜飼のおばさんから聞いた山姥の話を遊戯にしているのである。

まず三平が子供になる。物置の薪の上に腰かけている。

美代子は山姥になつて、彼方の松の樹の下に隠れている。

幸介はおじいさんで、今これから町に出かける処である。

「子供、子供。」

幸介のお爺さんが、物置の戸を開けて、三平に言いかける。

「お爺さんはこれから町へ出かけるぞ。留守の間に、どんな人がやって来ても、決して内へ入れるでないぞ。誰が来ても、決して戸なんか開けるでないぞ。」

「ウン、ウン。」

三平はうなずいて見せる。

「いいかい。解ったかい。」

「ウンウン。」

幸介さんは杖をついて、ソロリソロリと、家の彼方へ歩いてゆく。

それを見送つた三平は物置の戸をしめて、中で機を織り始める。

キコバタトン、カランコ、カランコ、

キコバタトン、カランコ、カランコ。

大きな声で三平が言うのである。この声を聞くと、松の

陰から山姥の美代子が顔をのぞける。

「どうやら爺さん、町へ出かけて行つたらしい。どれどれ、後の子供を御馳走になるとしよう。」

美代子は両手を顔の高さにあげ、指を開いて、向うに掴みかかるような形をする。そして物置の戸の前にやって来る。中では三平の子供が遠い山の上までも聞える大声をあげて、キコバタトンをやっている。

「トン、トン、トン。」

山姥は物置の戸を叩く。

「トントントン叩くは誰ですか。」

三平がたずねる。

「私はお前のお母さん、早くこの戸をあけてくれ。」

「いいえ、いいえ、いけません。お爺さんが町から帰って叱ります。誰が来ても戸を開けるな。中に入れてはならないと言いました。」

これを聞くと、山姥の美代子は首を傾げてひとりごとを言うのである。

「うまいことを言ってるぞう。さてさて、これはどうしたものか。一まず出直してくると、致しましょう。」

美代子は引返して、松の樹を一廻りし、また物置の戸を叩きにやって来る。

「トン、トン、トン。」

そこで三平が大きな声で聞き返す。

「誰だッ。トントントン叩いてんの山姥かい。」

「ダメッ、三平ちゃん、トントントン叩くの誰ですかって、小さくやさしく訊くんじゃないの。」

美代子が言う。

「あッそうかあ。じゃ、キコバタトンから始めるよ。」

三平は大変な声で始めた。全く山の頂上まで届くような声である。

「キコバタトン、カランコ、カランコ。」

そこで山姥が戸を叩く。

「トン、トン、トン。」

「トントントン叩くは誰ですか。」

「私はお前のお母さん、早くこの戸を開けてくれ。」

「いいえ、それはいけません。お爺さんが帰って叱ります。」

「それではここを少うし開けて、ホンのこの手の入るほど。」

「いいえ、手の入るほどでもないけません。やっぱりお爺さんに叱られる。」

そこで山姥が首を傾けてひとりごとを言う。

「はてさて、困ったことである。また出直して参りましょう。」

美代子は松の樹の処に引返し、そこを廻つて、また物置に出かけてゆく。

「トン、トン、トン。」

と、中では三平が愉快そうに笑い出す。

「ハハハハ、また山姥がやって来たぞ。」

「ダメツ三平チャン。」

美代子に叱られて、三平が言い直す。

「ハイ、山姥さんいらっしやい。お爺さんに叱られるので、この戸は少しも開けられません。手の入るほども開けられません。」

おかしさを堪えながら、外では美代子が言うのである。

「それでは指の入るほど、ホンの少うし開けて頂戴。」

「指かあ。指くらいなら開けてやってもいいんだが、開けると、美代子チャン怒るだろう。だから、やっぱり開けられないや。」

それでも、山姥美代子はまた松の樹の処へ帰って来る。

と、丁度その時そこへ鵜飼のおばさん、美代子の母がやって来た。手にハガキを持っている。

「あ、美代子チャン、大急ぎでこのハガキ出して来て頂戴。」

「え、ハガキ、じゃ、そこへ置いといて。今山姥遊びやってるんだから、すんだら、直ぐ出しにゆきます。」

「だって、大急ぎなんだから。」

「そうお。」

そう言うのと、美代子はハガキを貰つて、三平の処に相談に出かける。

「三平チャン、私、一寸ハガキ出してくるからね。五分ほど待ってて直ぐ来るから。」

「ハ―イ。」

美代子はポストへ駆け出した。三平は物置の中でカランコ、カランコ、キコバタトンをやり始める。然し、一寸と言つても、やはり中々美代子は帰って来ない。

「いやんなっちゃうな。もう山姥遊びやめようかしらん。」首を傾けて三平が言っていると、これも退屈になつて来た幸介が家の蔭から出て、三平の処へやって来る。

「三平チャン、どうしたんだい。」

「ウン、美代子チャンハガキを出しに行つたんだ。」

「ふーん。じゃ、一寸タイムなんだね。」

「ウン。」

そこで幸介も物置に入り、

「やーい、山姥ー、早く来オーい。」

などと声を合して呼んで見たりする。然しやっぱり山姥美代子の中々やって来なかった。そこでつい二人はいいことを思いついた。

まず三平が言ったのである。

「なあ、幸介ちゃん、山姥に僕とられることになるんだらう。だけど、それより山姥を退治する方が面白いじゃないか。」

「ウン、そうだ。その方がずっと面白いや。」

「じゃね、二人でここに隠れていてさ。こんど美代子ちゃんがやって来たら、山姥退治することにしよう。」

「ウン、ウン。」

二人の相談はきまった。それでは——というので、外から二本の竹の棒をさがして来たり、長い縄を持って来たりした。そして二人物置の中に、戸をしめて隠れていた。

「ハ―イ、唯今、ハガキ出して来ました。」

家の方で美代子の声を聞くと、二人は物置の中でクックツ笑い合い、それから首を縮めて忍んでいた。松の樹の辺に美代子の足音を聞くと、三平が泣き真似を始めた。

「アーン、アンアン、山姥が恐い。山姥が恐い。山姥が来て、僕をとって食べるウ。アンアン。」

これを聞いて、美代子は元氣が出て来た。どうやら大変面白くなって来た。

「トン、トン、トン。」

ニヤニヤしながら、戸を叩く。

「私はお前のお母さん、この戸を少うし開けてくれ。手の

入るほど開けてくれ。指の入るほど開けてくれ。」

「いいえそれはいけません。お爺さんに叱られます。」

「それでは爪のかかるほど、ホンの少うし開けてくれ。」

と、中で、三平と幸介は顔を見合せた。

「え、どうするんだっけな。」

三平が小さい声で幸介に訊いた。

「開けるンだよ。ホンの少し開けるンだよ。」

幸介が言うのである。が、声が小さく、三平は耳を幸介の口の方へ持つてゆく。外では美代子がトントンやってゐる。

「早くこの戸を開けてくれ。私はお前のお母さん、爪のかかるほど開けてくれ。」

そこで、中の二人は互に縄と棒を手にとって、戸の両側に身を縮め、そろりと、戸を手のかかるほど引き開けた。

戸が開くと、それに手をかけ、美代子は思いきり恐ろしい顔になり、出来るだけ恐ろしい声を出した。

「おうおうおう、わたしは恐ろしい山の山姥だあ。子供を食べにやって来たあ！」

戸を引き開けて、中に足を踏み入れた。これを見ると、中の二人は大声をあげた。

「わあーッ。」

そして両方から美代子の手を取り、その帯に縄を結んだ。